

まえがき

本書は“ビートルズ・ソロ作品読解ガイド（５）”（2022年9月発行）の続編である。同書においては、元ビートルたちのソロ録音で、1994年から2003年までの10年間に発表されたオリジナル作品を取り上げた。ジョン・レノン（既に故人）のものが9曲（+4篇）、ポール・マッカートニーが50曲、ジョージ・ハリソンが11曲、リンゴ・スターが38曲（それぞれ第三者との共作を含む）で、計108曲だった。

本書で焦点を当てるのは、2004～2012年に発表された91作品。マッカートニーのものが55曲、スターのものが36曲（それぞれ第三者との共作を含む）という内訳になる。レノンとハリソンのものが新たに蔵出しされることはなかった。

“ビートルズ英語読解ガイド”（2007年8月初版発行）以来一貫していることであるが、先入観を排し、根拠のない想像をできる限り抑えて、歌詞の原文を文脈と当時の状況から解釈するようにしている。

解説するのは、歌詞の中で、日本の平均的リスナーにとって理解し難いと思われる部分のみとなる。著作権尊重の観点からも、闇雲に全文を掲載することはしていない。歌詞の広い部分なり全体像を一目で眺めるには、CD付属の歌詞リーフレットや、市販されている楽譜などを参照して欲しい。本書はそのような出版物の代わりになるものではない。

作曲、編曲、演奏、録音、音盤化などの解説は行っていない。これらの点については、既に内外で多くの図書が出版されている。私の出る幕ではないと心得る。

記述の仕方について、改めて説明しておく。歌詞の中の語句に直接、強調して言及する際は、例えば *all right* のように、その語句をイタリック体で表記してある。＜feel free to V＞ や ＜settle for O＞ のように、＜＞で挟んであるものは、言い回しなどの基本的な構成を示している。「」に入っている和文は私の訳語。読者が理解しやすいように、敢えて逐語訳の域を出ないようにしてあることが多い。「直訳 ⇒ 意訳」という表示で、和訳の手順を示していることもある。他方、他書からの引用の前後には『』を用いた。また、著作物の題名は、VANITY FAIR や“虚

栄の市”のように、英語のものは大文字だけで記し、日本語のものは“ ”で括っている。

〔 〕内の文字は楽曲のタイトルを示す。数字の場合は、本書における作品番号。あくまで整理の便宜上のものである。〔X-123〕の如く、アルファベットを冠して、Mはマッカートニー、Sはスターキーが作詞者であることを表す。数字は前編からの延長で、個人ごとに年代順になっている。

ところで、改めて弁解しておきたいことがある。厳密に言うと、本書で扱う楽曲の中にビートル（ビートルズのメンバー個人）のソロ作品は一つもない。すべて元ビートル（ex-Beatle）の作品である。シリーズ初編の命名に苦労したが、“ビートルズ・ソロ作品読解ガイド”という題名に決めた以上、本書もそれを継承するほかなかった。

バンドとしてのビートルズが残した楽曲の多くは、永遠に多くの人によって鑑賞され続けられると思う。だが、元メンバー個人の作品は、既にCDなどを所有している人でも、聴く機会が少ないかも知れない。本書によって、そのような埋もれがちな名品が再発見され、再評価されることを切に願うものである。歌詞の背景と内容が正しく理解できれば、以前よりも一層興味深く鑑賞できるはずだ。

本書について意見などがあれば、聞かせて欲しい。異論や私が知らない情報は、特に歓迎する。

2025年5月
秋山直樹